

『沖縄の三線』にある三線のソー(棹)の長さの研究

Investigation into the length of the “pole” of Okinawa  
Sanshin documented in *Okinawa no Sanshin*

又 吉 光 邦  
Mitukuni Matayoshi

## 『沖縄の三線』にある三線のソー(棹)の長さの研究

Investigation into the length of the “pole” of Okinawa Sanshin documented in *Okinawa no Sanshin*

産業情報学科 又 吉 光 邦

### 【要旨】

本論文は、沖縄県教育委員会が発行した『沖縄の三線』(1992年)に採録されている沖縄の貴重な古三線のソー(棹)の長さについて、その量的・質的データをその制作年代毎に分けて統計的に分析をした。まず、琉球王府期の三線の与那城型と真壁型を比較分析したところ、古三線は、制作年代において有意な差が現れ、特に琉球王府期と昭和期で顕著であることを明らかにした。また、琉球王府期の三線について、その長さ、儒教との関わり、そして風水尺と呼ばれた唐尺との関わりを考察した。

### 【Abstract】

Statistical analysis was made of the length of the soo (the pole, including fingerboard and support spine) of the six hundred twelve valuable old *sanshin* selected and documented with photographs and specifications in *Sanshin of Okinawa* (1992) published by the Okinawa Prefectural Education Commission.

To begin, comparison of the soo of the Yunaa and the Makabe types of *sanshin* of the latter period of the Ryukyuan Kingdom reveals significant differences between these two types.

Also discovered here was that there appears to be a relationship between the Tang Dynasty measurement known as Feng shui measure and the length of the soo of the Okinawa *sanshin*. Subsequently, independent verification of this relationship was found in Meiji era documents reported in a 1999 publication of the Okinawa Prefectural Museum.

### 【目次】

はじめに

#### 1. 沖縄の三線

##### 1.1 三線の由来

##### 1.2 開鐘(けいじょー)

#### 2. 調査対象の三線

##### 2.1 三線の型

##### 2.2 ソー(棹)の制作年代

##### 2.3 ソー(棹)の各部位

##### 2.4 ソー(棹)の長さ

#### 2.5 仮説の検証

##### 2.5.1 「真壁型の大量生産による影響」の検証

##### 2.5.2 「三線と尺度の関係の崩壊による影響」の検証

#### 3. 三弦説と中国

##### 3.1 三線と儒教の関係

##### 3.2 三線と唐尺の関係

#### 4. まとめ

## はじめに

本論文では、平成4年度沖縄県文化財調査報告書第110集歴史資料調査報告書Ⅶ 沖縄の三線(沖縄県教育委員会)(以後、『沖縄の三線』)に記録された沖縄の古い三線(以後、古三線)の量的・質的データに着目し、それを統計的に処理することで、古三線の年代毎による寸法の違いや、型による寸法の違いを明らかにすることを主眼にしている。古三線の量的・質的データに着目した研究は、他に文献[30]がある。

『沖縄の三線』に採録されている古三線(合計612挺)は、制作年代が戦前であるものを全て対象としているので古三線について統計的に研究する上では、ほぼ十分な量といえよう。本論文では、これらの貴重な作品の数々を古文書だけでなく、数値で眺めることにより、明らかとなる古三線の「技」や「傾向」を述べる。

### 1. 沖縄の三線

沖縄の伝統楽器である三線は、中国の弦楽器である三弦(サンシェン)がその起源と考えられている。本章では、三線の歴史や由来に関する著者の論考を記す。

#### 1. 1 三線の由来<sup>1</sup>

『球陽<sup>2</sup>』には、西暦1392年「・・・更に閩人三十六姓を賜ひ、始めて音楽を節し礼法を制し、番俗を改変して文教同風の盛を致す。太祖、称して礼義の邦と為す。」(・・・更賜閩人三十六姓、始節音楽、制礼法、改変番俗、而致文教同風之盛、太祖稱為礼義之邦。)(文献[3], p.362-363)と記され、また『南方紀伝下巻』によれば、西暦1403

年武蔵国六浦に漂着した琉球船から「音楽の声有り」(文献[6], p.23)とある。

しかしながら、朝鮮王朝実録(李朝実録)の西暦1463年(世祖八年二月癸巳)のところで、朝鮮側が琉球王の使者に琉球の「歌舞はどういうものか。」(問歌舞。)と問うと「答えて曰く。一人掌を撃ちて歌えば、衆皆之に和し手を揺らして舞う。朝廷には正楽<sup>3</sup>無し」(答曰。一人撃掌而歌。衆皆和之。搖手而舞。無朝廷正楽。)(文献[2], p.37)と答えている。つまり、西暦1463年頃の琉球には、民間での楽曲はあったが、朝廷における組織的な「正楽<sup>3</sup>」が無かったと考えてよいだろう。

その後、西暦1509年に作られた『百浦添欄杵之碑<sup>4</sup>』には、「其ノ八、八珍九鼎ノ盛膳ヲ施シ、錢帛帶ノ奇珍ヲ賜フ。(中略)或ハ壁二屏軸シ、床二管弦ス。以テ賓客ヲ賞シ、臣民ヲ娛マシム、亦榮ナラザランヤ。」(文献[13], p.363)とあるので、西暦1400年代後半より朝廷に「正楽」が整い、賓客のみならず臣民に普及させたことがわかる<sup>5</sup>。

西暦1534年の『使琉球録』によれば、「樂に弦歌を用ふ。音頗る哀怨たり・・・」(文献[23], p.221)とあり、さらに、『琉球国由来記』の「貝摺奉行」(文献[24], p.21)のところに尚寧王代萬曆四十年(西暦1612年)の毛泰運保榮茂親雲上盛良を貝摺奉行に任命して、絵師・貝摺師のほか、三線打<sup>6</sup>を管轄させている。

以上を時系列に沿って考えると、少なくとも西暦1400年代後半から1500年代にかけて琉球王朝で「樂」が組織的に整備され、少なくとも1500年代半ばには、琉球王朝の

<sup>3</sup> 正楽：古代、儀式のときに奏でられた音楽。

<sup>4</sup> 首里城正殿前の欄干の碑銘。尚真王(在位1477年-1526年)の業績を讃える11項を記す。

<sup>5</sup> 『百浦添欄杵之碑』の「弦」を最初に指摘したのは、著者の知る限り、王耀華の「琉球人の三線志向考」(文献[13], p.363)である。

<sup>6</sup> ここで「打」とは、作るの意味。

<sup>1</sup> 三線の由来・伝来については、王耀華の「沖縄三線とその音楽の歴史を探る」(沖縄文化研究20、1993)に諸説がまとめられているので是非一読されたい。

<sup>2</sup> 西暦1743~45年から編纂された琉球の公的な歴史書。1876年(明治9)まで書かれる。全文漢文である。

正式な楽器の1つとして三線が定着したと  
考えて良い。それを示すのが、『利家や話』  
の三方原合戦(1572年)の条の「此度の大将  
は信長公我に仰付候、・・・二階にて三味線  
を高らかと小唄にのせる」(文献[6],  
p.23)と『上井覚兼日記』(1575年)の「・・・  
琉球人しゃひせんども曳候て、いろいろ会  
尺にて候。・・・」(文献[7], p.51; 文  
献[27], p.6)であろう。

その後、『球陽』に「当国、此細工、従前  
代有来也。中古、南風原云人、三味線造善  
工也。康熙四十九年庚寅、知念爾也、叙築  
登之座敷。公工為主取也」(文献[3],  
p.126)とあり、西暦1710年に知念が主取に  
任命されたと記されている。

ここで、知念以前に南風原という名工の  
いたことが記されていることに注目したい。  
南風原が活躍したのは、「中古<sup>7</sup>」の昔であ  
り、西暦1710年からかなり以前と考えてよ  
いだろう。また、南風原には役職名がつい  
ていない点にも注目したい。南風原は、三  
線を作ることを生業にしていた民間人であ  
った可能性もあるし、身分制度の基礎を  
確立した尚真王以前の臣民であった可能性  
も考えられてよい。「当国、此細工、従前代  
有来也」の書き方は、薩摩による琉球侵攻  
を受けた尚寧王(1564年-1620年)以前には  
存在していたことを示していると考えてよ  
いのではないだろうか。

他国の干渉を受けない独立王国として繁  
栄を極めた尚真王は、「臣民ヲ娛マシム、亦  
榮ナラザランヤ。」(文献[13], p.363)と奨  
励した王であるので、当時から民間に三線  
があったと推測することは可能であると思  
われる。

民間での三線の存在を裏付けるように、

『球陽』に記録のある妓女の志堅原比屋(文  
献[3], p.245, 554番)の三線は現存してお  
り、それには康熙28年の銘(1689年)とある。  
また、平安座島の八端太良<sup>8</sup>の三線も現存  
しているのは周知の事実である(文献[7],  
p.63)。これらは、民間に三線が親しまれ  
ていた証拠と言える<sup>9</sup>。

宮廷音楽で使用された三線以外の数々の  
楽器が家宝として、また琉球処分後に広く  
民間に愛された楽器として三線ほど現存す  
るものはないといっても過言ではない。家  
宝として沖縄に現存する三線や三線にまつ  
わる逸話は実に多い。これらのことは、昔  
から三線が広く沖縄(琉球)人に愛されてい  
たことを示しているよう。

三線が薩摩侵攻以前から広く民衆に愛さ  
れつづけた楽器であったと解釈すれば、琉  
球処分後の今日まで、現存する古三線の多  
さに対して納得が得られやすいのではない  
だろうか。

自分の命以上の価値与える沖縄の三線愛  
好者の気持ち、すなわち沖縄の三線の歴史  
が1879年の琉球処分以後から始まった(普  
及した)と解するよりは、琉球処分によっ  
て宮廷のみで演奏されていた三線のいくつ  
かの「楽曲」が民間に広まったとする方が、  
無理のないように思える。そしてそれを受  
け入れるだけの素地、すなわち三線を作る  
技量と三線を弾く技量、愛着が民衆の間に  
広く存在していたと考えるべきである。

それを示す好例として須藤利一訳のギル  
マートの＜大琉球見聞記。西暦1882年6月  
26日＞に「珍しい場面にぶつかった。五、  
六人の一群れの住人が、裸の山頂に集まり、  
西のほうを向いて、何か祭りが宗教的な儀  
式をやっているのであった。太陽がちょう

<sup>7</sup> 日本史では「中古」は平安時代(794年-1185年/1192  
年頃)を指す。琉球王朝期における「中古」がいつの  
時代を指すのかを特定できれば、南風原のおおよそ  
の年代もわかる。

<sup>8</sup> 『球陽』では乾隆丁巳(西暦1737年)没。文献[3],  
p.326, 1125番。

<sup>9</sup> 漆塗りの三線は高価であったであろう。ただ、三線  
そのものは、自前で制作できる。



ど沈もうとしており、我々の頭上には、猛烈な暴風雨の前兆の厚い層雲が集まっていた。強烈な光の洪水を浴びて、夕空に対してくっきりと一人の姿が立ち、ゆっくりと腕をくねらせながら今日の日に別れを告げる踊りを踊っている。そのうしろには、蛇皮を張ったギターを持つ人々が坐り、奇妙な、しかし決して不愉快ではない何か琉球歌の不協音を奏でている。やがて、音楽が止むと次の人が進み出て、変わって踊りの位置についた。我々は、この悲調を帯びた音楽と奇妙な光景に魅了されて、やがて、それらが遠ざかり、……」(文献[25], p.203)とある。

原著者は宗教的な祈りの場面ように見ているが、三線が奏でられ、次々と踊り手が登場していることからノロや神女による祈り等の祭祀ではなく、日没の前に始まった農作業後のモウアシビー<sup>10</sup>と推定されてよい。もちろん、今日一日の感謝の意味が、日没の太陽に対してあるだろうが、それでも屋敷の外で、日没時に奏でられた三線であることは確かである。三線は広く琉球の民衆に受け継がれてきた楽器であったことを示す貴重な記述といえよう。

## 1. 2 開鐘(けーじょー)

「開鐘」は、現在の沖縄における三線の名器の代名詞となっているが、それは真壁作の名器に限定すべきである。このことは、強く言い続けなければならない。

開鐘が世に広く知られるようになったのは、1916年(大正5年)の4月17日号の琉球新報の次の記事の後である(文献[4])。少し長くなるが、全文を記す。振り仮名は、記事のまま。

<sup>10</sup> モーアシビ(毛遊び)とは、かつて沖縄で広く行われていた慣習。主に夕刻から深夜にかけて、若い男女が野原や海辺に集まり、歌舞を中心として交流した集会をいう。

「五開鐘と云うのは何れも沖縄に於ける  
斯界の第一人者真壁里之子の作であるが尚  
穆王(著者注：在位：1752年－1794年)の御  
代御茶屋に真壁作の三味線を集めて弾き比  
べをした處が九ツとなり八ツとなり夜が更  
けるに従つて大抵の物は音色が悪くなる。  
獨り夜が更けるに従つて音が衰へないのみ  
か暁を告げる開鐘が山々を傳はつて響き渡  
るやうになつてもいやが上にも美しい音を出  
したのが五挺あるそこで其の五挺が真壁  
の作での優秀な物と定まつて孰れも徽章を  
授けられた。五開鐘と云ふのは其の五挺を  
指すものである此の五開鐘の中でも音の莊  
重なものがあつた軽快なものがあつたそれぞ  
れ特  
色があるが盛島開鐘が五開鐘中の首座とさ  
れて居る今度陳列されたのは右の盛島、西  
平、湧川、熱田、翁長の五開鐘中の盛島、  
西平(第四室)熱田(第一室)の三開鐘であ  
る。」

まず、理解しなければならないことは、この記事は真壁作の三線だけを集めて、それらを弾き比べ、その中のいいものに徽章が授けられたことを述べているということである。従つて、「真壁作の名器は開鐘と呼ばれる」と記すほうが適切である。真壁型以外に三線の名器は存在しないと思ひかねない表現を散見する。厳密に言えば、真壁が制作した三線のみしか「開鐘」を冠してはいけない。

次に、「開鐘」そのもの、およびその単語について、池宮が文献[1](pp.4－6)と文献[7](p.60)で疑問を投げかけているが、著者にも疑問が1つある。それは、「開鐘」は「開定」の誤りなのではないのかという単純なものである。

『琉球国由来記』には「御庭二楽器飾ルハ、螺赤頭奉行為職業。同筆者召列、早旦登場。(中略)。辰刻頭鼓、巳刻再鼓、午刻三鼓ア

り。朝拝ノ時、大鼓楽有之。且除夜五更ヨリ開定マデ、於御庭三度楽仕也。(後略)」(文献[24], p.20)と記されている。ここで「開定」とは、「起床」を意味する。つまり「起床」の時刻までの夜中は、御庭において何の音も鳴らさず、起床時、すなわち辰刻(午前8時)に「鼓<sup>11)</sup>」を打つ公務があるのである。この説を採ると「起床の時刻(午前8時)になるまで三線を弾き続けた」となるので、「鐘」と紹介した琉球新報の記事後半が成り立たない。

もちろん寺の鐘も時刻を告げるために鳴らされた。混効験集には「開静」とあるが、それは「日出卯の楼鐘百八の声をいふ」(文献[26], p.422, p.169)とある。この場合も「開静」は「起床」の同義語であることを忘れてはならない。ここでも「開静」を「開鐘」と当て字をし、洒落て呼称した王府期の確たる歴史的な事実がなければ、受け入れにくい。拡大的に解釈して、「開定」とすべきところを「開鐘」と洒落て命名し、以後、そのように呼ぶようになった。あるいは鐘を用いた「開静」を「開鐘」と以前から称していて、それを名器の呼称にした。》とすることもできよう。ただし、その場合には、琉球王府期の琉歌、あるいは特に『球陽』などの文献に「開鐘」と出てきてほしいものである。

歴史的文献を用いた考察では、「開門鐘(けいじょうがに)」であることを池宮正治が文献[1](pp.4-6)と文献[7](p.60)で詳しく述べている。そして新聞記事で紹介された話は「付会」(文献[1], p.5)なのではないかと指摘している。

確かに、古今琉歌集(明治44年;1911年成立)には「開鐘」と記された琉歌(1047番)が

あるが、未だ著者は、「開鐘」を琉球王府期の文献から探せずにいる。

文献[7]によれば、「盛島開鐘」の朱文字が盛島開鐘の胴内の側面に発見されているが、これに関して著者は学術的な朗報であろうと考えている。炭素年代測定法等の科学技術の進歩とともに、記述された年代が誤差数年単位ではっきり特定されると考えるからである。その際、著者の考え方を含め、「開鐘」に関する学術的な審判が与えられることになる。

## 2. 調査対象の三線

本論文で調査対象として焦点を当てているのは、『沖縄の三線<sup>12)</sup>』に採録されている三線(計612挺)の全長、ならびに各部位の長さである。

沖縄県教育委員会の発行した『沖縄の三線』は、沖縄県内に現存する古三線(琉球王府時代から昭和初期=太平洋戦以前までに制作されたもの)を調査の対象としている。対象となった三線は、『琉球三味線寶鑑<sup>13)</sup>』(池宮喜輝、東京沖縄芸能保存会、1954年)、『三線名器100挺展』(図録・沖縄県立博物館編集、1988年)の資料集に掲載された三線と「琉球三味線楽器保存育成会<sup>14)</sup>」の活動情報を基にして各市町村教育委員会の協力を得て予備調査が行なわれ、その後、調査対象リストを作成して三線の所持者(保管者)や関係者の調査協力を得て本格的な調査がなされたものである。

従って、本論文で扱う三線は、第2次世界大戦以前に製作された三線で、名器とし

<sup>12)</sup> 平成4年度沖縄県文化財調査報告書第110集歴史資料調査報告書Ⅶ 沖縄の三線(沖縄県教育委員会)。

<sup>13)</sup> 池宮喜輝は、『琉球三味線寶鑑』の調査時に「一万挺近くの楽器を審査」したとあり、単純に考えれば、戦後まで残った三線は6%程度ということになる。

<sup>14)</sup> 島袋正雄(会長)、会員13人、琉球の三線及びこれに関連のある諸楽器の保存・育成、調査、研究を行なうことを目的に月一回の三線の鑑定会を実施(『沖縄の三線』(1992年)による)。

<sup>11)</sup> 「開定」、「開静」も禅宗の言葉。の中で「鼓」は、「板」や「魚鼓(ぎょく)」を指す。

て名高い作品と言える。

### 2.1 三線の型

沖縄の三線には、いくつかの「型」が存在する。次に『沖縄の三線』に採録されている三線の型と挺数を示す。

- (1) 南風原型 (10挺)
- (2) 知念大工型 (19挺)
- (3) 久場春殿型 (8挺)
- (4) 久葉の骨型 (13挺)
- (5) 真壁型 (341挺)
- (6) 平仲知念型 (10挺)
- (7) 与那城型 (191挺)

沖縄の三線は、南風原型が最も古く、(1)→(7)の順となっている。それぞれの特徴は、文献[1][9-12, 15, 16]等で参考されたい。

### 2.2 ソー(棹)の制作年代

統計処理の対象である三線を制作年代で分別した挺数を表1に示し、琉球王府期の三線各型におけるソー(棹)の各部位の出現率を図1に示す。ただし、制作年代は『沖縄の三線』によった<sup>15</sup>。

表1 三線の制作年代

制作年代	挺数
琉球王府期	40
明治前期	35
明治後期	92
大正期	190
昭和初期	252
不明	3
計	612

<sup>15</sup> 『沖縄の三線』では、記載されている制作年代がソー(棹)の制作年代なのか否かの明記がない。ただ、ソー(棹)とその各部についての記載しかないこと、およびチーガー(胴)について詳細な記載が無いことから、本論文では、記載の年代は、ソー(棹)の制作年代と見なした。

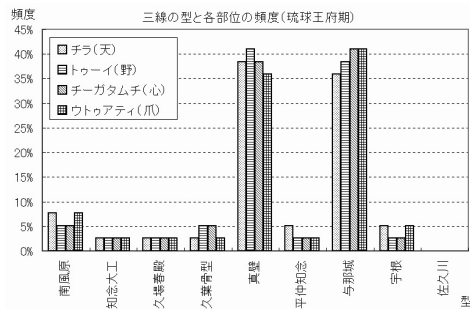


図1 琉球王府期の三線各部位の型頻度

図1より、真壁型と与那城型で全体の7割以上を占めることがわかる。従って、本論文では真壁型と与那城型に焦点をあわせる。ここで、三線の型によっても長さに若干の差異があると言われているが、それについての研究は今後に委ねたい。

### 2.3 ソー(棹)の各部位

本論文で統計処理の対象とした三線のソー(棹)の部位は、

- (a) トゥーイ(野)の長さ(野長)。
- (b) チーガタムチ(心)の長さ(心長)。
- (c) チルダマイ(糸蔵)の長さ(糸蔵長)。
- (d) ソー(棹)の長さ(全長)。

である。

図2に調査対象となったソー(棹)の各部位を示す。また表2～表5に(a)～(d)の平均の長さ標準偏差を制作年代毎に示す。ただし、『沖縄の三線』に長さの記載の無いものもあり、その場合は挺数が少なくなる。

表2 トゥーイ(野) 単位: cm

	件数	平均	標準偏差
琉球王府期	39	47.41	0.75
明治前期	35	47.61	0.71
明治後期	92	47.61	0.76
大正期	190	47.78	0.88
昭和初期	252	47.89	0.96

表3 チーガタムチ(心) 単位: cm

	件数	平均	標準偏差
琉球王府期	40	21.17	0.59
明治前期	35	21.03	0.44
明治後期	92	21.00	0.37
大正期	189	21.04	0.44
昭和初期	250	21.20	0.31

表4 チルダマイ(糸蔵) 単位: cm

	件数	平均	標準偏差
琉球王府期	40	3.44	0.46
明治前期	35	3.43	0.33
明治後期	92	3.50	0.43
大正期	190	3.35	0.30
昭和初期	252	3.37	0.36

表5 ソー(棹) 単位: cm

全長	件数	平均	標準偏差
琉球王府期	40	77.70	1.11
明治前期	35	77.83	0.92
明治後期	92	77.91	1.03
大正期	190	77.93	0.84
昭和初期	252	78.20	0.88

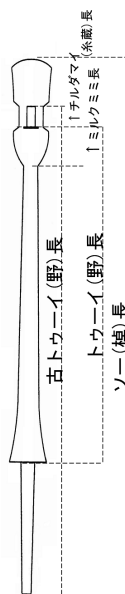


図2 ソー(棹)の長さ各部位

表3では、年代毎で長さの変化は見られないが、表2と表5では時代が新しくなるにつれ徐々に長くなっていくのが分かる。琉球王府期と昭和初期の差は5mmほどあり、昭和初期の方が長い。それはトゥーイ(野)が5mmほど長くなったことに起因することが分かる。一方、僅かではあるが表4よりチルダマイ(糸蔵)は、明治後期を境に短くなる傾向があるようである。

## 2.4 ソー(棹)の長さ

2.3節におけるソー(棹)の長さの増加傾向が統計的に見て有意であるのか否かを母平均の差の検定<sup>16</sup>とウイルコクスの順位検定<sup>17</sup>で求めた。それを次の表6と表7にそれぞれ示す。前者は母平均に差があるのかを調べ、後者は分布の重なり具合を調べる場合に使われる。

表6、表7より、琉球王府期、明治前期、明治後期の間には、有意差が見られないが、大正期から有意な差が現れ始めている。そして昭和初期の三線は、他の時期の三線に対してほとんどの部位で有意な差が認められる。これは、大正期を境にソー(棹)の長さに何らかの影響があったことを強く示唆する結果といえよう。

著者は、この大正期あたりから三線のソー(棹)の長さが変わり始めた理由として、次の2つの影響を考えている。

- (1) 真壁型の大量生産<sup>18</sup>による影響。
- (2) 三線と尺度の関係の崩壊による影響。

<sup>16</sup> 2つの母集団A, Bがある場合、そのそれぞれの母平均の差があるかないかを検定する方法。

<sup>17</sup> 2つの観察された分布間の重なり度合いが、偶然で期待されるよりも小さいかどうかを調べる方法。

<sup>18</sup> 本論文集に掲載の拙論文[30]を参照されたい。

表6 母平均の差の検定

	明治前期	明治後期
琉球王府期	- /- /- /-	- /- /- /-
明治前期		- /- /- /-
明治後期		
大正期		
	大正期	昭和初期
琉球王府期	**/- /- /-	**/- /- /**
明治前期	- /- /- /-	* /- /- /*
明治後期	- /- /**/-	**/**/* /*
大正期		- /* /- /*

注1) トゥーイ(野)/チーガタムチ(心)/チルダマイ(糸蔵)/全長。

注2) \* : 5 % 有意。 \*\* : 1 % 有意。 - : 有意差なし。

表7 ウイルコクソン順位和検定

	明治前期	明治後期
琉球王府期	- /- /- /-	- /- /- /-
明治前期		- /- /- /-
明治後期		
大正期		
	大正期	昭和初期
琉球王府期	* /- /- /-	**/* /- /**
明治前期	- /- /- /-	* /**/- /**
明治後期	* /- /**/-	**/**/*/**
大正期		- /**/- /*

注1) トゥーイ(野)/チーガタムチ(心)/チルダマイ(糸蔵)/全長。

注2) \* : 5 % 有意。 \*\* : 1 % 有意。 - : 有意差なし。

## 2. 5 仮説の検証

前節で、昭和初期の三線のソー(棹)の各部位の長さが他の年代の三線と異なっていることが示された。本節では、その理由として考えた2つの仮説を検証する。

### 2. 5. 1 「真壁型の大量生産による影響」の検証

「(1)真壁型の大量生産による影響」については、文献[30]によって示された真壁型の大正期からの急激な増加。すなわち、琉球王府期、明治前期、明治後期にあった真壁

型と与那城型の残存挺数(図3参照)が逆転していることを考慮しての仮説である。

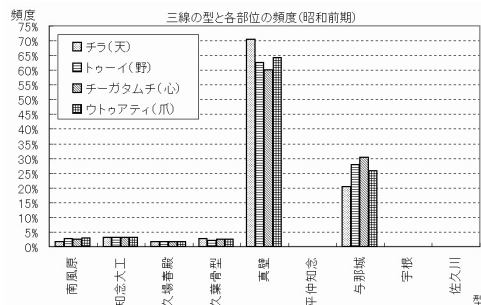


図3 昭和前期の三線各部位の型頻度  
(出典：文献[30])

2. 3節で、三線のソー(棹)の長さに最も影響を与えているのは、トゥーイ(野)であることが分かったので、表8に各年代のトゥーイ(野)長と挺数を示す。ただし、トゥーイ(野)とチラ(天)の両方が同じ型の三線のみを対象とした。

表8 年代毎のトゥーイ(野)長

	トゥーイ(野)長(cm)		挺数	
	真壁型	与那城型	真壁型	与那城型
琉球王府期	47.57	46.99	13	11
明治前期	47.84	47.52	11	15
明治後期	47.43	47.77	30	39
大正期	47.81	47.67	94	54
昭和前期	47.96	47.79	155	50

網掛けは、2つの型の長さを比較して、長いところに掛けてある。

表8より、明治後期を除いて真壁型のトゥーイ(野)が僅かに長い。さらに、大正期で真壁型の挺数は、与那城型の約2倍、昭和初期で3倍を超えている。これらの影響が母平均の差の検定、ならびにウイルコクソンの順位和検定において有意な差となって現れたと考えることができる。

従って、「(1)真壁型の大量生産による影響」によって、昭和初期の三線の長さとそれ以前の三線の長さに差異が生じたとの仮説は、支持されてよい。

## 2. 5. 2 「三線と尺度の関係の崩壊による影響」の検証

表8より、トゥーイ(野)の長さが伸び始めているのは、琉球王府期から明治前期の間で顕著であることが分かる。最終的に、琉球王府期と昭和初期のソー(棹)の長さを比べると真壁型で約4mm、与那城型で8mmほど伸びていることが分かる。与那城型の伸びが特に顕著であるが、これは与那城型が真壁型の長さに近づいたことを示していると思われる。また、明治後期で真壁型が与那城型より短くなるが、この時期までは与那城型が真壁型より多くの良器を有して

いる時期であり、真壁型が与那城型に近寄ったと解釈できよう。いずれにしても、琉球王府期から比べると明治前期に顕著にトゥーイ(野)が伸びている。

この理由として、著者は明治度量衡法によって、「尺の長さ<sup>19)</sup>」が変化したことを挙げたい。文献[21][22]において琉球王府期の1尺は29.78cm程度であったと著者は推定している。仮に琉球王府で享保尺(1尺=30.363cm)が用いられていたならば、現在の三線は若干短くなるはずであるが、その逆に伸びている。これはすなわち、琉球王府期に使用していた尺は、現在の尺(30.3cm)よりも短いことを示している。

図4は、著者が調べた中で一番古い三線の各部位の長さ(尺)の記された図である。図は伊勢貞丈(1717-1784年)の作とされている。

表9 古文書の三線の各部位の長さ

単位：cm

番号	各部の名称	尺	領台前	日本	明(14-17世紀)			清(17-20世紀)		
			魯班尺 29.78	享保尺 30.363	裁衣尺 34.02	榮造尺 31.9	量地尺 33.35	裁衣尺 51.13	榮造尺 46.08	量地尺 49.49
①	竿長(ソ-棹)	1.92	57.17	58.29	65.31	61.24	64.03	98.16	88.47	95.02
②	堅(チ-ガ <sup>*</sup> 胴)の縦	0.67	19.95	20.34	22.79	21.37	22.34	34.25	30.87	33.15
③	横(チ-ガ <sup>*</sup> 胴)の横	0.62	18.46	18.82	21.09	19.77	20.67	31.70	28.56	30.68
④	厚(チ-ガ <sup>*</sup> 胴)の厚	0.28	8.33	8.50	9.52	8.93	9.33	14.31	12.90	13.85
⑤	ミルクミ(乳袋)+ チルダ <sup>*</sup> マイ(糸蔵)+ チラ(天)の長さ	0.48	14.29	14.57	16.32	15.31	16.00	24.54	22.11	23.75
⑥	チルダ <sup>*</sup> マイ(糸蔵)	0.12	3.57	3.64	4.08	3.82	4.00	6.13	5.52	5.93
⑦	チラ(天)の厚み	0.04	1.19	1.21	1.36	1.27	1.33	2.04	1.84	1.97
⑧	チラ(天)の横幅	0.2	5.95	6.07	6.80	6.38	6.67	10.22	9.21	9.89
⑨	①+②(全長)	2.59	77.13	78.64	88.11	82.62	86.37	132.42	119.34	128.17
⑩	①-⑤ (旧トゥーイ長)	1.44	42.88	43.72	48.98	45.93	48.02	73.62	66.35	71.26

<sup>19)</sup> 尺の長さは、時代により異なる。江戸期の尺は、享保尺といわれ、1尺=30.363cmとされている。現在、単に1尺=30.3cmとして換算する場合が多いが、正しくない。また、琉球では独自の度量衡があったことが文献[21]で述べられている。

図4より各部の長さを活字体に直すと表9を得る。また、表9には著者が琉球王府時代の尺と考えている領台前の魯班尺<sup>20</sup>をはじめ、日本の享保尺、中国の明代と清代の尺による長さを併せて記す。

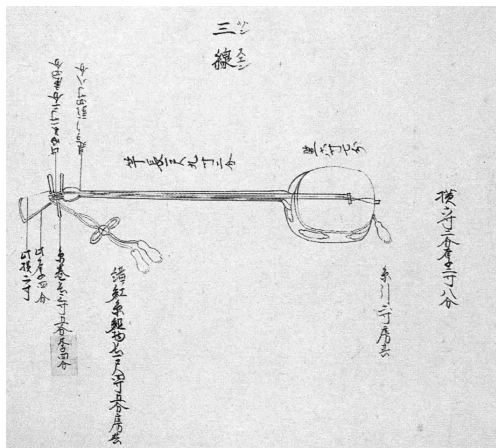


図4 三線の図(古文書)  
(出典：文献[19]，p.73)

表10 三線のソー(棹)の長さ

	ソー(棹)長 (cm)		挺数	
	真壁型	与那城型	真壁型	与那城型
琉球王府期	77.43	77.44	13	12
明治前期	77.59	77.92	11	15
明治後期	77.32	78.34	30	39
大正期	77.65	78.06	94	54
昭和前期	78.01	78.70	155	50

表10には、『沖縄の三線』のチラ(天)とトゥーイ(野)が同一型である真壁型と与那城型のためのソー(棹)の長さの平均と挺数を示す。

琉球王府期のソー(棹)の長さは、真壁型と与那城型ともに77.4cm程度でこれは、表9の魯班尺で求めた長さに極めて近似

<sup>20</sup> 著者は、この領台前の魯班尺が沖縄で唐尺と呼ばれていたものと考えている。また、この魯班尺は、日本における唐尺の「小尺」と同じ長さである。詳しくは、文献[21][22]を参照されたい。

(77.13cm)する。享保尺では78.64cmとなるので、享保尺が使用されていたとするのは難しい。また、明代と清代の尺では、まるで当てはまらないことも分かる。

以上から、琉球王府期に用いられていた1尺の長さは、当時の日本そして中国の尺の長さと異なると推定されてよく<sup>21</sup>、かつ琉球王府期の三線は琉球の尺(唐尺)を用いて測られ、製作されたと考えてよい。沖縄の尺は明治度量衡法の施行によって、1尺当たり5mm程度の増長となるのだが、それによって、三線の長さに変化がもたらされたことになる。

以上より、「(2)三線と尺度の関係の崩壊による影響」は、支持できるものと推定する。

ここで、参考までに琉球に独自の度量衡があったことを示す公の文書を紹介したい。それは石垣島に残る西暦1810年に記された古文書「漂着并破損人賄例」(文献[33]，p.49)である。

#### 漂着并破損人賄例

- 一、唐人・朝鮮人、出所不相知異国人飯米相渡候節ハ、官斗公升を用可申候、琉斗用間敷候事
- 二、日本他領人飯米相渡候節者琉斗升可用事
- 三、漂着人飯米・野菜・薪木無之、海上飯米相渡候節ハ一日例を以廿日分可相渡事

このことから、琉球王府時代には琉球独自の尺が普段から用いられたと推し量ることはできよう。

次節以降で、風水思想と沖縄(琉球)三線との関わりを詳しく論ずる。

<sup>21</sup> 仮に三線だけの特別な「尺」があったならば、現在まで継承されていたであろう。

### 3. 三弦説と中国

#### 3.1 三線と儒教の関係

沖縄の三線は、中国の哲学が込められていることは、次の図4で分かる。



図4 三味線之説(出典：文献[8]，p.48)

図4の上部の「三味線之説」の箇所を活字体に起すと下記となる。ここで、この絵が描かれたのは「光緒壬寅三月(西暦1902年4月8日～1902年5月7日)」である。すなわち、琉球処分後23年後の明治35年である。写した人の署名は「上院石北山之寫」(下線部は判読し難い)。

この活字体は、富原守清の『琉球音楽考』(pp.221～222)<sup>22</sup>にあり、それを参考に再度原文を起し、不足は( )内に補った。また、訳文の一部が王耀華の「琉球人の三線志向考」(pp.371～372)<sup>23</sup>にあり、それを参考に著者が書き下した。

#### 原文「象天地人也」

##### 三味線之説

夫三味線者三神也、象天地人也、昔黄帝之所作、上圓象天也、下方法地也、三弦法人也。大弦為君、中弦為臣、小弦為民。大弦音濁不可彈多、所謂為人、君勿聽勿見勿言。君之德也。中絃音和。上諫君下教民臣之道也。小絃音清廉。而勞萬事民之道也。愚按人能彈時、左手為上以達化生陰陽五行之音、右手為下以學循序人事之統。此下學上達之理也。天地相去九萬九千餘里、天道與人事不差者猶弦音上下相應者。蓋天地萬物本吾一體。吾心正、則天地之心亦正矣。吾(之)氣順、則天地之氣亦順矣。此彈弦極功、聖人之能事、初非有待外、(而)脩道治國平天下之教亦在其中矣。

沉静篤實 浮躁淺露

<sup>22</sup> 誤字がいくつかある。「唐三弦説」としているが「三味線之説」。また、前半部分で「音」を「聲」としている。本論文の著者の又吉は、沖縄の三線について初めて学術的な著書を残したのは、富原守清の『琉球音楽考』(文献[18])と考える。

<sup>23</sup> 当用漢字を用いている。また「三味線」を「三線」とあえて直している。



書き下し文「象天地人也」

三味線之説。

夫れ三味線は三神也、天・地・人<sup>かたど</sup>を象る也、昔の黄帝の所作にして、上圓は天を象る也、下方は地の法也、三弦は人の法也。大弦は君を為し、中弦は臣を為し、小弦は民を為す。大弦は多く弾くべからず音を濁す、所謂、人のため、君は聴く勿れ見る勿れ言う勿れ<sup>24</sup>。君の徳也。中弦の音は和。上に君を諫め、下に民を教えるは臣の道也。小弦の音は清廉。而して萬事に勞す民の道也。愚按するに、人よく弾く時、左手を上となして以て陰陽五行の音を化生するに達し、右手を下となして以て循序人事の統を学ぶ。此れ下学上達の理なり。天地相去ること九万九千余里なるも、天道と人事と差あらざるは、猶ほ弦音の上下相応するがごとし。蓋し天地萬物は本吾が一體なり。吾が心正なれば、則ち天地の心も亦正し。吾が氣順なれば、則ち天地の氣も亦順なり<sup>25</sup>。此れ弾弦の極功、聖人の能事、初めより外に待つこと有るに非ずして、国を治め天下を平らかにすの道を脩むるの教も亦其の中に在り<sup>26</sup>。

沉静篤實 浮躁淺露

王耀華は、文献[13] (p.370-371)で、「三神」と道教の「三才」と相応し、「天道與人事不差」は「天人合一」の理を含み、道教の教条と相一致すると述べている。

<sup>24</sup> 小学嘉言68「夫子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。四者身之用也。」(夫子曰く、禮に非ざれば視ること勿かれ、禮に非ざれば聴くこと勿かれ、禮に非ざれば言うこと勿かれ、禮に非ざれば動くこと勿かれ、と。四の者は身の用なり)。

<sup>25</sup> 中庸章句第一章「蓋天地萬物本吾一體。吾之心正、則天地之心亦正矣。吾之氣順、則天地之氣亦順矣。」(蓋し天地萬物は本吾が一體なり。吾が心正なれば、則ち天地の心も亦正し。吾が氣順なれば、則ち天地の氣も亦順なり。)

<sup>26</sup> 中庸章句第一章「此學問之極功、聖人之能事、初非有待於外、而脩道之教亦在其中矣。」(此れ學問の極功、聖人の能事、初めより外に待つこと有るに非ずして、道を脩むるの教も亦其の中に在り。)

著者は、「三味線之話」の中に「天地人」「陰陽五行」に易経を見出し、脚注24-26にあるように小学と中庸があることを考えると、三線は中国の儒教の教えを具現化し、投影した楽器とすることができると考えている。また、三弦を天地人とせず、君・臣・民とするところに、儒教観の封建社会を色濃く反映した琉球の姿を見て取る。

ここで、著者は特に「天地人」と「陰陽五行」が記されていることに注目したい。易経は風水と関係が深いことで知られているが、陰陽五行は、魯班経(文献[28], p.82-95)において魯班尺の説明にも出てくる。著者は領台前の魯班尺が、琉球の唐尺そのものであると考えている(文献[21][22])が、琉球で「唐尺」と呼ばれた尺には、「吉凶」の陰陽の文字が記されている(表11参照)。この唐尺と三線の関係の詳細については、次の3.2節で述べる。

ところで、「どのような人物が「三味線之説」を記したかについて」を考えてみたい。文にあるように君を諫め、民を教化し、「大弦音濁不可弾多、所謂、為人君勿聴勿見勿言、君之徳也。」と書き切るところに官僚としての自負が見えるように思う。筆写されたのは明治35年であるが、「三味線之説」を最初に描き記したのは、三線に造詣の深い琉球の士族と覚えてならない。恐らく、久米村出身の官僚、すなわち閩人の子孫だったのではないだろうか。

一般に「唐三弦説」として知られているこの「三味線之説」は、中国由来(文献[13], pp.370-371)とされているが、著者はそれに対して少なからず疑問を抱いている。なぜなら、それが中国に残っていない(文献[13], pp.371)こと、並びに儒教の四書から抜き出して文を構成した感があり、三線そのもののオリジナリティに大いに欠けるからである。さらに付け加えて言えば、タイ

トルが「三弦」ではなく「三味線」であること、図中の三線の各部の名称そして「三味線」としながら、日本にもこれが残っていないことも指摘されてよい。

著者は、琉球が中国と日本の両方の文化を取り入れた歴史的な背景が、この「三味線之説」に現れていると考える。

また、「三神」を「天地人」と結びつけて考えている点は、『中山世鑑<sup>27</sup>』や『おもろさうし<sup>28</sup>』(文献[32], pp.314-315)の琉球開闢にあるテダコ(日神)の「天」、アマミキヨとシネリキヨによる「地」と「人」の創造の話を連想させる。一般的に中国において「三神」は、「三神山<sup>29</sup>」を示し、「天地人」を指さない。日本における「三神」は、古事記の「造化の三神<sup>30</sup>」が有名であるが、天地開闢とともに生まれた神代の神々であり、「人」の創造は含まれない。

以上の考察より、「時の琉球の王が、数名(文の内容からすると4名<sup>31</sup>ほど)の学識者に考えさせたのではないだろうか」と、考えられなくもない。

著者は「三味線之説」に三線に特別の愛着を持つ琉球人の思いを感じて止まない。

### 3. 2 三線と唐尺の関係

3. 1 節で「三味線之説」に中国の思想、哲学の儒教が色濃く反映していることを述べた。陰陽、五行説は「易経」であり、それらの用語は魯班尺(魯班真尺)と呼ばれた尺の説明に頻繁に出てくる(文献[28],

pp.82-103)。琉球(沖縄)では、この魯班尺のことを「唐尺」と呼び、「風水尺」や「吉凶尺」とも呼んでいた。

唐尺の長さは、長さを計る尺の1.44倍の長さを持っている(詳しくは、文献[21][22]参照)。表11は、沖縄で用いられていた唐尺の目盛りと、表9の①~⑩の長さに、±5mmの偏差を加えて記したものである。唐尺の“財病離義官劫害本”の各文字の割り当てられている長さは、魯班尺を基準にした場合、約5.35cm。その1文字の中ある小目盛り4つの文字それぞれに割り当てられる長さは、約1.34cmである。

表11を見てみると、

「吉」・・・チーガ(胴)の縦長	②
チーガ(胴)の横長	③
旧トゥーイ(野)長	⑩
チルダマイ(糸藏)長	⑥
チラ(天)の厚み	⑦
「凶」・・・全長(ソー(棹)長)	⑨
チーガ(胴)の厚み	④
旧トゥーイの上側分	⑤
チラ(天)の横幅	⑧

となる。これより、旧トゥーイ(野)とチーガ(胴)の縦横、そしてチルダマイ(糸藏)など、音色を左右するところに「吉」が来ているといえよう。「凶」となっている箇所、音と直接関係がありそうなのは、チーガ(胴)の厚みだけであるが、それ以外は、三線の装飾部である。

「三味線之説」で述べたように、琉球の人々は三線に風水思想が流れていることを知っていた。従って、三線の寸法を決める際にも風水思想を織り込んだ尺、すなわち「唐尺」、別名「風水尺」が用いられていたとする考えは、合理的といえる。

<sup>27</sup> 琉球王府の正史で全5巻。向象賢(西暦1617~1675年)が西暦1650年に編纂。

<sup>28</sup> 琉球王府時代の古謡で全22巻1554首。13世紀中葉から17世紀中葉までの400年間のオモロが1531年から1632年に渡って首里王府の採録集成によって編纂。

<sup>29</sup> 中国で、東方絶海の中央にあって、仙人の住むと伝えられた、蓬萊、方丈、瀛州(エイシュウ)の三山の総称(文献[31])。

<sup>30</sup> 「天御中主神」「高皇産靈神」「神皇産靈神」。天地開闢をはじめ、高天原にあらわれて万物を經營したという三神(文献[31])。

<sup>31</sup> 著者は、儒教といい「象天地人也」の「象」といい、向象賢の関わりを雑感する。

表11 三線の各部位の長さや唐尺

		表 9 の各部位									
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
財	財徳										
	天庫										
	六合										
	迎福										
病	退財										
	公事										
	牢執										
	孤寡										
離	長庚										
	却財										
	官鬼										
	失脱										
義	添丁										
	利益										
	貴子										
	大吉										
官	順科										
	横財										
	進益										
	富貴										
劫	死別										
	退口										
	離郷										
	失財										
害	災至										
	死絶										
	病臨										
	口舌										
本	財至										
	登科										
	進宝										
	盛旺										

ここで、全長が「凶」を指すのは、チラ(天)とミルクミミの長さ起因すると思われる。チラ(天)はソー(棹)に対して斜め(正確には曲面)なので、斜めの長さを計った場合に1.5cm 以上長くなれば、旧トゥーイ(野)の上側部は「吉」を指す。具体的には、ミルクミミの付け根から上部の⑤(表9)は14.29cm(魯班尺の換算)となってい

るが、15.6～15.7cm 以上であれば「吉」を指すことになる。

しかしながら、⑤が「吉」の長さとなっても、⑩(全長)はまだ「凶」のままである。⑩が「吉」を指すためには、さらに伸ばす必要があり、実際には80.5cm 以上(134cm 以下)必要<sup>32</sup>である。

ここで、⑤と⑩が「吉」の時、「凶」の目盛りを指す部位は、チーガ(胴)の厚み、チラ(天)の幅のわずかに2箇所となるが、チラ(天)の幅を5mm 程短くすると「吉」となる。従って、チーガ(胴)の厚みだけが、補正で「吉」とならない部位となる。

以上をまとめると、少々、無理な感もあるが、三線のほとんどの寸法は、「唐尺」において「吉」の位置に当たるようにデザインされていると言えなくもない。特にトゥーイ(野)は、その名が示すとおり「音の通り道」であり、その長さが唐尺の長さ(1.44尺)に全く等しいのは、偶然とは思えない。

著者は、この「唐尺」を用いた寸法取りによって琉球(沖縄)の三線が、日本の三味線や中国の三弦など、近隣地域の分布する系統と異なる独自のサイズ、具体的には異なるソー(棹)の長さや、異なる大きさのチーガ(胴)を生み出しているのではないかと推察している。

ここで、中国北部の三弦は、120cm 程度あるといわれているが、表9より清代の榮造尺を用いれば、その長さになる。一方、中国南部の三弦は90cm 程度といわれているが、明代の榮造尺で制作すると8cm 程長

<sup>32</sup> チーガ(胴)の厚みが8.33cm なので、⑤(ミルクミミの付け根から上部)の斜めを考慮したおおよその長さは、 $(14.29^2 + 8.33^2)^{1/2} = 16.54\text{cm}$  以上となる。実際には、曲面であるためもう少し長いだろう。この三平方の定理で得た16.54cm は、⑤の14.29cm よりも2cm 程長く、この時の⑩(全長)は79.38cm となるので、残り1.1cm 程あれば、⑩(全長)も「吉」を指すことになる。ただし、すべて魯班尺換算の場合。

いものになる。

#### 4. まとめ

本論文は、『沖縄の三線』に採録された三線の長さ、特に琉球王府期と昭和初期に注目して統計的分析を行った。その結果、三線の長さが若干伸びてきていることを明らかにした。また、その理由を求めて、沖縄の双壁をなしている真壁型と与那城型に焦点を当て詳細な分析を行ったところ次の2つの仮説、すなわち

(1) 真壁型の大量生産による影響。

(2) 三線と尺度の関係の崩壊による影響。  
が支持されることを示した。

その後、(2)の仮説を検証する際に考慮した琉球王府期の三線の長さが、「唐尺」に基づいている可能性を示した。そしてさらに、「三味線之説」に記された三線に対する思想が、儒教と深く関係していること、そして易経の影響もあることを明らかにし、思想的な観点からも「唐尺」の使用の可能性を述べた。また、「三味線之説」が、琉球の地において考え出されたのではないかとの論考を行った。

謝辞

沖縄国際大学のKaren Lupardus教授には、私の拙い英語要旨の添削をいただいた。この場をお借りして感謝の意を表したい。

投稿受付日：2009/05/15

投稿採録日：2009/06/05

#### 参考文献

- [1] 『平成四年度 沖縄県文化財調査報告書 歴史資料調査報告書Ⅶ 沖縄の三線』、沖縄県教育委員会、1993.3.
- [2] 『朝鮮王朝実録 琉球史料集成 訳

注篇／原文篇』、池谷望子、内田晶子、高瀬恭子、榕樹書林、2005.5.

- [3] 『球陽 原文編』、球陽研究会、角川書店、1974.
- [4] 琉球新報記事、大正5年4月17日号.
- [5] 「蛇皮線考」、山内盛彬、琉球季刊(八号)、pp.10-13、琉球史料研究会、1958.
- [6] 「三味線の伝来(遺稿)」、宮城真治、琉球季刊(九号)、p.23、琉球史料研究会、1958.12.
- [7] 『三線名器100挺展(図録)』、沖縄県立博物館、1988.
- [8] 『特別展 三線のひろがり可能性展』、沖縄県立博物館、1999.8
- [9] 「琉球三線考」、又吉真三、琉球の文化 第二号、pp.182-185、琉球文化社、1972.9.
- [10] 「琉球三線考」、又吉真三、琉球の文化 第三号、pp.178-181、琉球文化社、1973.3.
- [11] 「琉球三線考」、又吉真三、琉球の文化 第五号、pp.235-237、琉球文化社、1974.5.
- [12] 「私の三弦考」、宮里良成、p.182、琉球の文化 第三号、琉球文化社、1973.3.
- [13] 『沖縄文化研究 19』、王耀華、pp.357-377、法政大学沖縄文化研究所、1992.9.
- [14] 『沖縄文化研究 20』、王耀華、pp.145-189、法政大学沖縄文化研究所、1993.12.
- [15] 『山内盛彬著作集 第一巻』、沖縄タイムス社、1993.3.
- [16] 『山内盛彬著作集 第三巻』、沖縄タイムス社、1993.3.
- [17] 『琉球音楽考』、富原守清、沖縄書籍株式会社(再販：琉球文化社)、

- 1934.7(1973.1).
- [18] 「琉球音楽考－琉球聲樂の變遷並に其内容構成に關する基本的見解」, 富原守清, 郷土藝術, pp.10－24, 1934.6.
  - [19] 『琉球三味線寶鑑』, 池宮喜輝, 東京沖繩芸能保存会, 1954.7.
  - [20] 『世界に誇る・琉球王朝文化遺産－ヨーロッパ・アメリカ秘蔵』, ドイツー日本研究所, 1992.9.
  - [21] 「久米島自然文化センター紀要第8号」, 又吉光邦, pp.7－16, 2008.3.
  - [22] 「唐尺についての一考察」, 又吉光邦, 産業情報論集第4巻第2号, pp.43－56, 2008.3.
  - [23] 訳注『陳侃 使琉球録』, 原田禹雄, 榕樹社, 1995.6.
  - [24] 『定本 琉球国由来記』, 外間守善・波照間永吉, 角川書店, 1997.4.
  - [25] 『須藤利一 異国船来琉記』, 須藤利一, 法政大学出版局, 1974.9.
  - [26] 『混効驗集 校本と研究』, 外間守善, 角川書店, 1970.3.
  - [27] 「おもろと歌三味線」, 仲原善忠, 沖縄文化 第2号, pp.6－12, 沖縄文化協会, 1961.8.
  - [28] 『魯班経』, (明) 午榮匯 編／易金木 訳注, 華文出版社, pp.82－103, 2007.9.
  - [29] 『三線のはなし』, 宜保榮治郎, ひるぎ社.
  - [30] 「統計処理から見た『沖縄の三線』の特徴」, 又吉光邦, 産業情報論集第6巻第1号, pp.33－45, 2009.9.
  - [31] 『広辞苑 第五版』, 角川書店, 2006.
  - [32] 『古琉球』, 伊波普猷, 琉球新報社, 1965.
  - [33] 『石垣市史叢書4』, 石垣市総務部市史編集室, 石垣市役所, 1993.3.